

Risk Flash No.137 (Vol.4 No.27)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
発行責任者：リスク研究センター長 久保英也

- シリーズ「環境と経済」：第4回 松下京平・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Page 1
- 研究紹介：得田雅章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Page 2
- リスク研究センター通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Page 3

環境と経済④

まつしたきょうへい
社会システム学科准教授 松下京平

2013年9月23日から26日にかけてスウェーデンのストックホルムで開催された「気候変動に関する政府間パネル」において第5次評価報告書が受諾されたのはご存知でしょうか。本報告書は気候変動に関連して「確認された事実」および「将来の予想」を科学的データに基づき、まとめあげた一連のレポートです。今回は、(1) 1880年から2012年で世界平均気温は0.85℃上昇した、(2) 2100年までに世界平均気温は最大4.8℃、平均海面水位は最大0.82m上昇する可能性がある、(3) 温暖化は私たちの人間活動の結果である可能性が高い、等の報告がなされました。本報告書は、問題は今後さらに深刻化する可能性が高いことを示唆しており、世界各国が早急に気候変動対策に取り組むことを訴えています。それでは、この問題に対して、いま日本はどのように対応しようとしているのでしょうか。以下では、日本が抱えるエネルギー問題に触れつつ少し検討してみましよう。

福島第一原発事故という未曾有の大災害を経て、日本政府は、これまでの原子力依存型のエネルギー政策を見直し、多様なエネルギー源に分散したエネルギー供給体制へと移行していくことを検討し始めています。ですが、太陽光や風力等のいわゆる新エネルギーは技術的・経済的観点からエネルギー政策の主軸となるには依然として相当な時間がかかります。そのため、当面は、発電費用が比較的安くて供給能力規模も随一である既存の火力発電を活用して、原発の一時停止によるエネルギー供給不足分を賄う必要があります。ですが、このとき忘れてはいけないのが気候変動問題です。なぜなら、化石燃料を用いた火力発電の利用拡大は、気候変動を引き起こす主原因である二酸化炭素の排出量増大を意味するからです。

実は、日本は国内の厳しいエネルギー事情から気候変動対策の一つである京都議定書から2013年以降一時離脱しました。もちろん、国内事情を勘案すると議定書からの離脱はやむを得ないことかもしれません。ですが、世界的に二酸化炭素排出量がこのまま増え続けた場合、私たち人類にとって取り返しのつかない事態がいつ起こるとも限りません。そして、そのツケの多くは私たちではなく将来生まれてくる子どもたちが払うことになるのです。私たちはいまこそ深謀遠慮を巡らせ、現在におけるエネルギー利用の在り方と同時に後世のために良好な環境を残す術を模索する必要があるのではないのでしょうか。

研究紹介

私を取り巻く研究状況

経済学科准教授 とくだまさあき 得田雅章

アベノミクスが岐路に立っている。来春からの消費増税を決めたものの、株価は足踏みし外圧(特にアメリカの債務上限問題に端を発するリセッション)も予断を許さない。正念場と言ってもいいだろう。

こうした状況を私自身に置き換えてみる。私もそうだ。正念場にいると自覚している。遅々として進まない業績の量産、そして無駄に齢を重ねることがプレッシャーとなっている。そこで自戒を込め、私を取り巻く研究状況について以下に書き記そうと思う。

我々のような研究者は、基本的にその研究成果が認められてナンボだ。

- ・どれだけ教務に熱心でも
- ・どれだけ骨身を削って学内行政に従事しても
- ・どれだけ地域貢献に精を出しても

専門分野で意義ある研究成果を出さなければ、対外的には無能と位置づけられてしまう。

一方で、ただ駄文を重ねればよいというものでもない。研究論文には2種類があり、査読(レフェリー)付き論文とそうでない論文だ。後者はそれこそポンポン量産できるが、前者はそうはいかない。投稿しても基本ハネられる(リジェクト)。何度も何度も投稿し、やっと条件付きで採択され(アクセプト)、専門雑誌に掲載される運びとなる。

そうした査読論文のクオリティを高めるには、独力でいくら頑張っても限界がある。そのため、定期的に学会や研究会に参加し、同じ畑の研究成果を見て触れるのだ。自分自身でも発表の機会を持つこともある。

このように淡々と研究の仕組みを綴ってはみたが、私自身の身に置き換えてみると、なかなか深刻であり生々しくなる。参加した某研究会では面罵にも似た辛い処遇を受けてしまうし、あまたの雑誌に投稿するものの、ことごとくりジェクトを食らってしまう。その結果は産廃ならぬ「学業廃棄物」の排出だ。

学生の前ではいくら偉そうな態度をとっていても、また、地方自治体の〇〇委員会では有識者としてふんぞり返っていても、場面が違えば見事なほど立場が逆転してしまうのだ。その結果、落ち込んでしまうし、自らの無能を嘆いたりもする。

ただ、そういう過酷な境遇をバネにしてきたのも事実だ。少なくとも本学に認められたからこそ、今のポストに就いている。精魂込めた研究成果に対し無碍にリジェクトの判を押した連中や、何ら建設的な意見をいただけないのに、ただディスっていただいたセンセイ方には、万感の思いを込めてより素晴らしい成果をたたきつけようという気概はあるつもりだ。

こう綴ってしまうと暗い感情と評されるのは承知の上だが、それが私の研究推進の大きな原動力であることは否めない。

さあ、このエッセイを書き終えたら、早速研究に取り掛かろう。否定した全てを見返すために。

リスク研究センター通信

グアナファト大学イングリッド・バラダス先生によるセミナー開催のご案内

本学大学院経済学研究科修士課程修了生であるマルティン・パントハ教授（グアナファト大学）のご尽力により、グアナファト大学経済・経営学群と本学経済学部間の【相互教員派遣プログラム】が今年度よりはじまりました。このプログラムで来学されるイングリッド・バラダス先生による「Research Seminar」を開催いたします。学部間の研究交流の本格的なスタートとなる記念すべきセミナーです。



セミナーの詳細は、

<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=topics:1514&r=0> をご覧ください。

お問い合わせ先：経済学部総務係

「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください

【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量が一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】

1. 配信メールが回線上的問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

(<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3:12>)

*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

編集委員：ロバート・アスピノール、大村啓喬、金秉基、久保英也、
柴田淳郎、得田雅章、宮西賢次、山田和代

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局 (Office Hours:月一金 10:00-17:00)
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp

Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>